日本精神保健福祉士協会
（JAPSW）
愛媛県支部広報出版部

しぶしぶ通信

2002年6月
第17号

特集～座談会“広報出版部この一年は・・・。”

≪久万の山奥の奥にてマジメな座談会を開きました・14. 4. 27≫

～得たもの、失ったもの～

谷：皆さん、この一年間の活動本当にお疲れ様でした。あっ、まだ１７号が残っとった。（笑）まあもうひと頑張りするとして・・・、部会の活動を通して皆さんにもいろいろな思いがあったと思います。座談会のテーマ企画で大うけだった五領田母の提案。“この１年間の活動で得たもの失ったもの”。からスタートしましょう。まず和田さんは何を失いましたか？（笑）

和：そうですねえ、昨年は違う部で活動をしていて、部会の前に一応考えてはくるんです。でも今年は部会に対しての準備というか、取り組み方が違ってきましたね。それぞれの部員がしっかり考えてくる・・・それで初めて議論ができて企画が進む、問題点があらわになる。広報のおかげで何かをする時に考えるくせというのがついたと思います。失ったものといわれても・・・、得たものの方が多かったと思いますよ。結構楽しくやれたと思うし。

谷：大森さんはどうやった？

大：失ったものといえば、それは安全な運転ですよね（笑）。何回死にそうになったことか…。日付が変わってからの帰りは睡魔が襲ってきますよ。ついこの間もはっと我に帰ると前に壁が・・・・。ほんとに死ぬかと思た。（笑）

森：僕も同じですね（笑）。途中で久万に引越しましたから。三坂峠を猛スピードで何回駆け抜けたことやら。

谷：二人とも生きててよかったなあ。頼むから広報では死なんといてな。死ぬときは役員会のときにしてな。（どっと笑い）

大：そんな、何てことを言うんですか！！（笑）

谷：ホント気をつけてよ。檜垣さんは子供さんも小さいし、大変だったでしょう。

檜：やっぱり家庭の時間がかなり減ってしまいましたね。子供のことがほったらかしになってしまって（笑）。

谷：必ず子供さんからの携帯が鳴っていましたもんね。でも、そうやって子供はたくましく育

つんですよ（笑）。

檜：おかげさまでたくましく育ってます（笑）。

五：うちも家庭のことがあまりできなくなってしまいましたね。でも本当にみんなすごいなと思いつつ、職場以外で仕事の話ができる人を得られたというのは財産ですね。職場で話ができるのは山田さんだけですから。

谷：やっぱり外の人と話ができる機会っていう意味では大きいですよね、職場ではなかなかそんな真剣な話ができんもんね。村上さんはどうやったかな？

村：広報の活動の中でわからないなりにも自分の意見をまとめたり、整理したりしてきたことで、前よりは自分の意見を少し言えるようになってきたかなと思います。ほんとは失ったものはあまり思い浮かばないんですけど、睡眠時間ですかね。

谷：前原さんは、広報にスーパーバイズ、年がら年中この顔とつき合わすのいやになったでしょう？（笑）

前：そんなことはないですけど（笑）たいへんでした、んー、やっぱり時間がなかなかないのと、宿題が次々に襲い掛かってくるんで。つい最近、寝込んでしまったのもやっぱり忙しかった最中だったですから。

谷：2月、3月、4月辺りは僕も含めてヘロヘロでしたよね。4月は僕も救急のこと病院のこと・・・・いつ倒れるのかと。最後は抜け殻になってしまったもの。（笑）

～仕事の中で部会活動がどう生きたか～

谷：この一年、広報出版部の仕事も大変でしたが、仕事の中でこの活動がどういう風に影響していたのかを聞きたいね。和田さんいかがだったですか？

和：今までなら、仕事をしていても考えることもなくスーッと通り過ぎていたことが、部会での習慣となった“まず自分で考える”ということがあって、気をつけて振り返るようになったと思います。“気づき”“振り返り”の場面が少し増えたと思います。

谷：そやね。村上さんは？

村：広報に参加して2年になりますが、それまでは誰から何を聞いても“ふんふん、そうかそうか”と全部肯定して受け入れていたんです。自分の中に判断する材料がなかったので、全部正しいものとして漠然と入ってきていました。広報でいろんなことに取り組んでいけばいくほど、それは違うんじゃない？とか、私だったらこう思う、みたいにより分けというか自分の考え方が少しずつ見えてきたような気がします。

谷：自分の価値観みたいなものが出来つつあるんだと思うよ。特集に取り組むときは、まず自分たちは何を訴えたいのかということを練りに練ってから進めていったもんね。一つのことについてのものの見方いろいろな角度から考えて、自分の意見をまとめる、っていうことが、少しずつ出来始めた結果だと思うよ。これには終わりはないからいつまでも続くよね。五領田さんは、初めての参加でどうでしたか？何か仕事とリンクしましたか？

五：私は、素人やからいっつも変なことばっかり言って“五領田語録”なんか言われて（笑）

でも、わからんことでも考えたことをいってそれがどんな意味があるのかみんなの意見を聞かせてもらって、すごくよかったんですよ。仕事場ではなかなかそんな話が出来んし、知らんことばっかりやったです。しんどかったけどね、ええ事のほうが多かったですよ、ほんとに。そういう風に考えないかんのかと、わからんこともいっぱいありましたけどね。

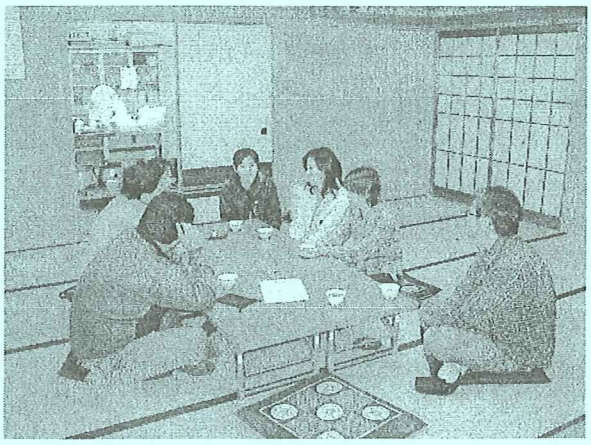
谷：五領田さんは、新しい風を吹き込んでくれましたよ。ホントに今年のメンバーはバラエティーに富んどったもんね。

大：五領田語録は山とあるけど全部ちゃんとひかえとったらよかったですよね。もったいない！！（笑）僕も４年間ずーっと広報だけだったけど、まあ、ホントにだいぶ変わりましたよ。最初の年は結局２回しか出版できんかった、通信の中身も初めは交流誌みたいな考え方で、どんな会員がいるのかとか、新人紹介とか、後は何か会があったときの報告という感じでしたね。それが暴走してだいぶたたかれたこともありましたが・・・(笑)。ホントこの２年はしんどかったですけどね、面白かったですよ。まあ帰りは眠かったですがね。最初は谷本さんがいうとおりに進めていっていたけど、途中から２つのグループでやりだしたのがよかったですよね、誰かがやってくれるんじゃなくって自分たちでやらなくては進まない、考えないと始まらない・・・。

谷：そのスタイルにしてからみんなの取り組み方が変わったよね、出来るまで粘る。１２年度の最後に村上さんがはじめて特集のリーダーをやって支援センター問題をやったのが始まりでね。まああとで聞いたらあのときの特集メンバーは何回集まったのやら。よう頑張ったよね。あれから自分たちの力でやれるところまでやる習慣がついたよね。それからは特集をやりたい人を募ったらみんなが手を上げて僕は毎回“特集”はやらせてもらえんかったもん。（笑）前原さんはどうやったですか？

前：私の職場は“痴呆病棟”ということで、話も最初はわからないことが多かったです。でも仕事に取り組む考え方は共通するなと感じ始めて、勉強にはなったですよね。制度なんかのことも広報をやっていたから、他の会員よりはすごく勉強できたと思う。“突撃ルポ”という企画を、和田さんとはじめてやったときには、夢中で、平日に“びっくりドンキー“（ファミレス）の片隅で、こそっとコンセントにパソコンの電源さして二人で編集作業を。気がつけば朝の４時・・・なんて事も。その日は仕事にならなかった。（笑）

谷：僕も後で前原さんの上司に“朝の４時までやらしたらしいね、あんまりシゴいてもろたら困るよ”いうて怒られたんよ。（笑）僕も知ら



んかってびっくりしたんじゃけどね。檜垣さんはこの一年どうやったですか？子供さんにもほんと迷惑かけました。

檜：広報は大変なんやろなとは思っていましたが、でもいろんなことを深く考えさせられて、仕事にも考え方がだいぶ影響しました。こういうことを語れる場も人も職場にはないので、考え方が一方的にならないよう自分の中でまとめることができるようになったのかな？救急のことでも、県の考え方や、保健所の体制を自分の中で見直すことが出来たと思います。

谷：最後に森さんは？職場はホントに苦しい立場やけど。

森：自分の職場は一人で、誰とも相談したり出来ないので広報をやったから一緒に活動することでもやもやが解消されるようなこともあったと思います。とにかく職場には問題山積みで解決のしようもありませんが、少しずつ自分が動くことで変えていかなければとあきらめずにやろうと思っています。

谷：そのために久万に移り住んだんやもんね。これからよね。

森：救急のことを通しても行政が、医療機関があんなにええかげんなものとは思わなかったし、変えていく力は自分たちにもあるんやなと改めて感じました。

～広報出版部のこれから～

谷：広報出版部のこれからですが・・・この１年間を振り返って、しんどかったことも含めて反省点と今後こうしたらいいなと思うことはどんなことでしょうか？和田さん、どうですか？和田さんは今年はじめてよね。

和：時間がだいぶかかったので、しんどかったです。これからはもっと短い時間でできればと

思います。でもそう苦痛には感じなかったんですよ。自分の考えを形づくっていきたいですよね。まだまだわからないことばっかりですから。

谷：今年はみんなに負担をかけ過ぎたな？と僕自身も反省しとるんよ。でも、一年という約束がもう一回だけといわれ、来年度も２度あることは３度あった・・・。（笑）去年から１年で僕がいなくてもみんなでできるようにしていくということが目標だったから・・・。でもほんとにみんな自分の意見が持て始めたし、それを表に出せだしたと思うよ、つくづく。１年延びて来年も部長をすることになりそうだけど、来年はもっとみんなに任せてまとめ上げてもらいたいとと思っとるんよ。そうはいっても多分次々口出すけどね・・・。（笑）それから僕自身もすごく勉強になったし、刺激になった。しんどいけど仕事の活力剤になったと思うよ。五領田さん、来年はどうですか？

五：来年もやるの？（笑）は冗談で、みんなが職場では触れられないことを情報源として提供できること、それよりも部員自身が自分のものになる財産を築ける様にやりたいですね。

谷：前原さんは今年で広報２年目だけどどう思います？

前：今年は通信に載せる話題が中予の話題ばかりだったので・・・集まるのが大変だけど、広

報出版部のメンバーも東・中・南予から出すといいかなと思ったんですが。

谷：前は、東・中・南予のメンバーだったんだけど、みんなが集まるのが大変というわけで、中予ばっかりになったんよね。大森さんには南予から毎回出てきてもらっているけど･･･、体力と交通費がね、大変やったからね。多分来年は中予で引き受けないかんようになるんじゃないかな。檜垣さんは、どうですか？

檜：やはり、時間がだいぶかかって、大変だった。私は、後でゆっくりと自分の考えがまとまってくるタイプだけど、これからはその時々の考えを自分なりにまとめておいて、部会に臨むようにしたいなと思います。そうすれば効率もよくなると思うし。

谷：村上さんは？

村：しんどいというのはそうですが、時間を短くして早く切り上げてあまり中身がないものになってしまうのもいけないと思うんですよね。いいものをつくるのにはやっぱりある程度時間が必要だと思うので、ただ短くすればよいとは思わないんです。広報の活動はすごくしんどいですけど、すごく面白いんですよね。だから来年も続けたいという気持ちはあるんですが、今年のようなスピードで何回も集まって、毎回遅くまでとなったらとても難しいと思うんですよ。だから檜垣さんも言われたように、考えや意見を事前にしっかりまとめておくことが必要だなと思いますね。でもそれがなかなかまとまらなくて大変なんですけど・・・。

谷：そうじゃね。まあ来年度は村上さんは試験じゃけんね、１０月から１月までの４ヶ月間は活動を封印してあげるけん。頑張ってよそっちも、後がないしね。まあ本気で頑張ったら大丈夫よ。

森さんはどう？この間ももう９時近くになって、携帯で「これから行きます」言うて久万から４０分で部会に来たわいね、もうかまん言うのに・・・。

森：もともと、自分は深く考える方ではなかったんだけど、広報出版部の活動をするようになって、どうしてなんやろか？とか、これはどういう意味があるんやろか？とか、常に考えるようになったと思います。できる限り取り組みたいと思っています。

谷：それでは、大森さん。大森さんは役員として広報に関わって５年よね。大森さんも今年は試験があるから広報も来年度は出来んじゃろうけど。今後の抱負は？

大：頑張りますけん。（笑）

谷：最初は３０分で、といっていたけどやっぱり１時間ちょっと過ぎてしまいました。まあほんとにこの一年みんなよう頑張ったと思うし実力もそれなりにつきつつあると思うんで、来年もよろしく頼みますわ。今年培ったものを来年も生かしてください。それじゃこのあと“チョー豪華ディナー”の準備をさせてもらいますんで、じゃんけんで負けた人から、温泉に入ってください。じゃんけんに勝って選ばれた人は手伝ってくださいね～。（笑）

全員：じゃあ、最初はグー、じゃんけんぽん！！！！

・・・・・そしてメンバー全員は温泉の後、酒池肉林の世界に入っていったのだった・・・・・とさ。

おわり

一泊温泉旅行記

ばばんば
ばんばんばん♪
はぴばのんのん♪

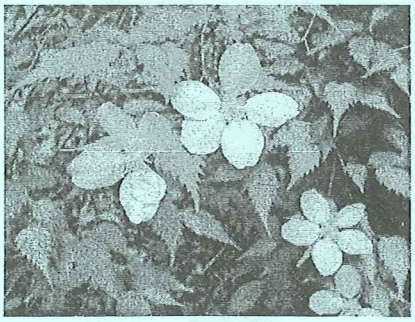
13年度のお疲れ様と特集座談会をかねて広報出版部の温泉旅行！！？？

4月27日

出発日！！昼間での仕事を終えて、急ぎ足で味酒心療内科に笑顔で集合。皆もいつもの部会での顔とは違い、何やら新鮮な表情（昼間だからか?!いやいや…）。部長の愛車（ステップワゴン）に７人が乗り込み、一行、久万町へいざ出発！宿泊先の一歩手前で M さんが乗車。参加者８名全員が揃い、一安心。

部長任せのナビと運転で、ワゴンは山の細道を地元人のようにあっさり登っていく。出発から約３時間後（途中買い物）、久万町の山の奥の奥にある宿泊先『ふもと友愛館』に到着。聞いていた通り、携帯も通じない（H さん、お子さんとの連絡手段が!!）、本当に何もない…というと俗っぽいけれど、見渡す限りの自然。ほんのりと冷たい空気は、きっとここでしかない自然とセットのものかしら、と暫し自分の世界に浸ってしまう。宿は、モクモクを噴きだしている煙突付きの一軒家。気の良い管理人さんと一緒で何とも暖かい。

到着後間もなく、付近を各自思い思いに散策する。４つ葉のクローバーは見つけると幸せになるというが、7.5 葉も発見（突然変異か?!）。M さんのいう通り、“7.5 葉、幸せ度が違うのかも…ふふっ”と実は期待。他、食料探し等、うろうろ・のんびり…自然と戯れる。ちなみに O さんは川へダイビング



せず、うなぎを取り逃がす。残念（笑）。

座談会は早いうちに終え、お風呂グループと夕食準備グループに別れ、いそいそと取り掛かる。ジャンケンに勝ってしまった私は最後の入浴グループ（やや悲）。しかし、やっと入れた温泉は…もう最高！あのぬるぬる感が何とも言えず、熱めのお湯が「お疲れさま～」と言ってくれた（ように感じました）。

間もなく準備も整い、外での夕食は…アウトドアディナー気分で。チョー豪華メニューにびっくり！！ バーベキューとは伺っていたが、スペアリブ、チキン、野菜と共に、何とマグロの刺身にかつおのたたき等、海の幸、山の幸三昧。私の大好きな馬刺しも発見！！程よく油がのった味と食感はかなりグルメでした（大喜）。寒さはそっちのけで、食し、話し、飲む。管理人のおいちゃんも身内のように最後まで宴に参加。しかし、会話中に約一名が意識不明に陥る（笑）。あげく男性２人に何とか抱えられて、運ばれた先は何となく小さな布団。O さん、それ以上は言いません（大笑）。その傍らで、M さん達女性 2 人は、もう一度入浴タイム。皆で布団を敷き、間もなく就寝。

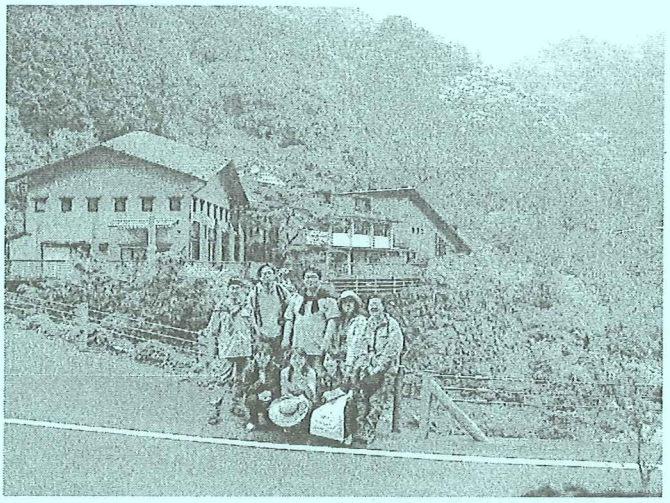
4月28日

朝気づくと既に台所から心地の良い響きが…。男性陣が朝食・昼の弁当の準備をして下さっている（驚）！！　おかげで女性陣は睡眠と朝支度に専念（?!）できました。朝食は、これまた芋粥や味噌汁、目玉焼き・目刺等で大満足！もう昨日からいつもの食と違う違う（大喜）。そして、午前中のうちに出発、って“どこに??”とまた部長任せ…。

途中、へんろ道へ寄りつつ、2時間あまりで着いたのは、高知県吾川村にある『ゆの森温泉』！！そこでやっと“南下してたんだ!!　”と気付く（遅

い）。まっ、とりあえず“入浴か?”と思ったら、近くの中津渓谷を征するためピクニックへ出発。

遊歩道の花や植物について、「これは何という植物ですかね??」「…（笑）。」等の会話をしながら山道を進む。運良く雨が上がったばっかりで、息はまだ白かった。所々にある「雨竜の滝」（落差20m）・「竜宮淵」・「石柱」等も見物。また、大きく出っ張った岩壁はかなり印象的で、体が反るくらい見上げると、今にも崖崩れでもありそうな迫力でした。それと、つり橋を渡る時、足の何メートルも下に広がる川とその流れの音がやや怖かった（小心者）。（…どなたか揺らしていませんでしたか？気のせい…??）と言っても、自然に触れ、感じ、親しむ、とは今日みたいな日をいうんだ、とつくづく感じました。昼食は…風流な木の薄皮に包まれたおにぎり（水戸黄門のうっかり八兵衛が持ってそうなもの）や卵焼き等等…やはりパクパクッ



と頂きました（大喜）。

「明日は筋肉痛か?!」と話していたのもつかの間、2時間ほど（やや疲労）のピクニック終了後、『ゆの森』入浴タイム。山間にひっそりとある、この温泉（通な人しか知らないだろう…）。露天風呂の、更にベストポジションを確保し寝そべって（部の母：Gさんから伝授）見た空は青さと緑の広がりに思わずボーッとしてしまいました（喜）。お湯でリフレッシュした後は、ふらふらっとおみやげ物を見て、全員揃ったところで一路松山へ。

味酒心療内科に帰りついたのはもう6時を回っていました。

いつもと違う場所で、時間も気にせず考えず、食べ話しつつ…。内容は盛りだくさんなのにのほほ～んと過ごせたこの一泊二日。部会の皆さんと、こんなにも自由な時間を過ごせて楽しかったです。そしてT部長、企画して頂いたうえにいろいろな準備まで…。本当にありがとうございました。後でデジカメを見るのが楽しみです。

幸せな温泉ツアーでした！それでは、またっ！！

座談会居残り組インタビュー≪森脇氏≫

インタビュアー・和田、村上

イ　：温泉旅行一緒に行けなくて残念ですよね。

森脇：そうですね、ホントは行きたくてうずうずしてたんですけどねぇ。

イ　：座談会の代わりといっては何ですが、森脇さんの話を聞かせてください。広報出版部との出会いはどこからなんですか？

森脇：そうですね。部会というより、どなたからかは分からないんですけど、「総会があるんです。」との電話が職場にあって。去年度もあった…んかな。“どんな会なんやろか～、何か関係者の集りなんやろな～、情報や意見交換の場みたいな感じやろう”ということで今年は行ってみたんですよ。

イ　：電話のときに、どんな集まりとかいう説明は無かったんですか？

森脇：森脇：まっ、行ってみたんですよ。そして周り見たら“スーツって僕だけやん…。”とか思いつつ、話聞いてたんですよ。で、終わりかけたとこで、「それぞれの所へ別れて…。」って司会の人が言うんで。“何するんやろ。あっ、小グループで何か話すんかな”と思いつつ、流れのままに部屋へ行ったんですよ。そしたら、「それでは今年度の広報出版部メンバーが揃ったところで…」と始まり、“え…？？？”って（笑）。そこがたまたま今の広報出版部やった（笑）

イ　：あっさりと（笑）？？

森脇：あ～、気付けば（笑）。しかも、話を聞いていくうちに、「何度か集る…」、「年４回の出版…」って言ってて。更に心の中で“えっ、え～！！！”ですよ（笑）。とのことで、この一年が始まり今となりました。もうそれだけです（笑）。もっ、ホントに（笑）。

イ　：えっ、事前に部会の希望を出すとかは？

森脇：そんなの無かったですよ（笑）

イ　：そういうこともあるんですね～（笑）じゃ、実際に活動してみてどうでしたか？

森脇：もっ、ホントそれだけで。こんな、インタビューなんて申し訳ない（笑）！！

イ　：いやいや。実際、けっこう部会って頻回やったし、何か感想とかは？

森脇：ん～、そうですね～。皆さん、何時間という会をずっと真剣に話されとって、“凄いな～”、って思いましたよ。どこもあんな感じなんですかね？でも、大森さんとか、部の人と出会えて良かったです。今の職場に居て、精神科にソーシャルワーカーが居ることも知らんかったし、ホント全然分からなくて。

でも絶対これから大事ですよ、精神保健福祉士っていう職種は。やっぱりそこそこの精神保健福祉士が窓口になる、とか。で、これから精神保健福祉士もどんどん外に出て欲しい、んですよ。あの～、精神科っていう領域の中だけじゃなくって、もっと外に向けてアピールしていった方がええんやないかなぁ、とか僕なんかは思いますね。だって知らない人多いと思いますから。で、五領田さんも言ってましたけど、アイデンティティー、アイデンティティーって、精神保健福祉士そのものが既に皆さん持ってると思うんですよ。いろんな話を聞いていたら僕はそう思いましたよ。

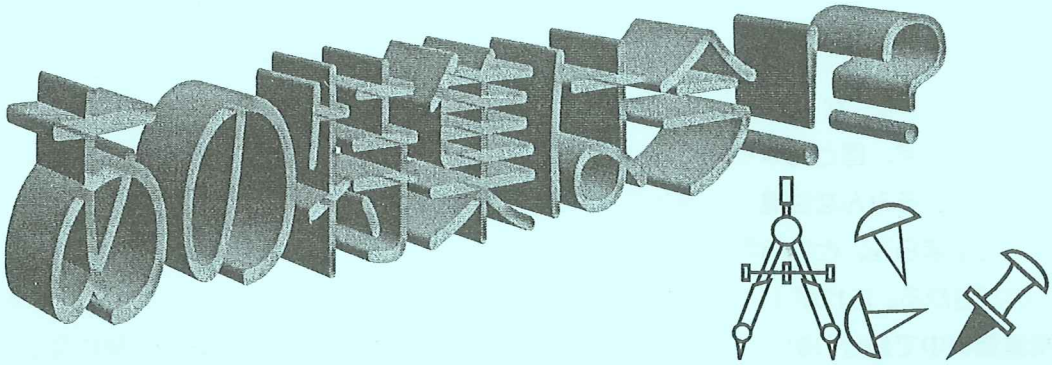
イ　：最後に、反省というか、次への抱負というか、思うところは…あります？

森脇：抱負ですか…（笑）。僕今の職場、２年たって、でもなかなか職場のこともやり切れてないし、こっちのことも集中ながらって思っています。

もっ、ホントこのくらいで…。

イ　：じゃ、このくらいで（笑）。ありがとうございました（笑）！玄関にあった“*とっても安い丈夫な花の苗*”を買って帰ります～す！！

森脇：あっ、じゃどの苗を？？・・・・・・・



毎度おなじみ「しぶしぶ通信」も平成１３年度の発行はひとまず今回で最後です。今年度も色々取り組みました。部員一同が苦しみながら生み出した“しぶしぶ通信”、ご熟読いただけたでしょうか？会員の皆様にもおおむね好評の様子、しかし、その声はまだ形になっていませんでした。そこで今回は会員の皆様に、かつて「しぶしぶ通信」で取り上げた特集についての意見・感想を執筆していただき、その声を形に残すこと、そしてそのテーマの現在を見つめ直すことで今後を考えるという企画をしました。

１４号「『触法精神障害者』という言葉から精神保健福祉士として感じること」

昨年夏ごろ、あらゆるメディアで「触法精神障害者」という言葉を見聞きしました。我々精神保健福祉士の間でも特に疑問を持つことなく使用されていた言葉だったが、「もしかしたら自分では気付かない内に触法精神障害者という新しい枠組みを作ってしまっているのではないだろうか？」という疑問から１４号において特集で取り上げました。

宇和島病院　田中透

しぶしぶ通信第１４号では、触法精神障害者という言葉について特集されていました。私はこのテーマについては、重く受け止めているつもりですが、一方で、一体どのようにとらえてよいかわからない、と悶々としているのも事実です。

このように同一県内のワーカーの生の声を聞ける機会があるのは、このような誌面でこそ可能なのだと思います。「触法」というと、身の引き締まる思いがするものですが、一人で考えていても始まらない。やはりそれをめぐって皆で対話を重ねていくことが大事なのではないか・・・。経験の浅い私としては、「明確な結論は出ないかもしれないが、経過そのものが精一杯の結論になる」と信じてやっていくつもりでおります。

王子共同作業所　山口名都美

「うわーっかわいそうに」「どうして？イヤやなー」「何でこんなことを・・・」「人間のすることかー！」「残酷すぎる」

池田小学校児童殺傷事件が起きた時、作業所でメンバーの口々から発せられた言葉。作業所だけでなく、あまりにも悲惨なこの事件は恐怖、怒り、悲しみの日本国と化した。当然外国にも大きく報道されたであろう。そんな中、犯人は精神障害者であると何度もしつこく繰り返し報道され、「精神障害者」を装った犯人に対し、やるせない思いと新たな複雑な怒りがおさまらない。マスコミでは相変わらず通院歴があるじゃないか、措置入院歴があるじゃないか等々、毎日続く報道合戦・・・。

「世間から、自分らも同じようにみられるんやろーなー、いややなー」とメンバーのひとりがぽつり。「ほんとやなー」と力なくいう人もあれば、

無言のままのメンバーも。「いっしょにされたらたまらんで」「本当に」「迷惑なはなしやなー」。メンバーの会話に入れないまま、何ともやり切れない複雑な気持ち。ここにいるみんなは違う。確かにいっしょにされたらたまらん、という思いが強く自分の中にあるのが分かる。これが《“しぶしぶ通信”による日常業務の中で自分の都合のいいように区別、差別を行っている自分に気付いていますか？精神保健福祉士としての自分の姿を見つめなおしてみよう》だろう。なるほど、「病気や障害を知ってほしい・理解してほしい・偏見や差別のない街であってほしい・・・」等々地域に向かって言っている自分もいる。

報道によっては精神障害者は皆同じに見られているおそれがある。当然、それぞれ顔が違うように性格もちがう、まさしく「十人十色」。精神障害者だからといって決して特別な人達ではない。だから当たり前に法によって守られ、法によって裁かれ、法によって平等でなければならない、と思う。

今まで自分の中で避けてきたように思う「触法精神障害者」という言葉。日常の言葉になってほしくないなぁとも思う。

しぶしぶ通信の大ファンの一人としてあまりにも簡単に原稿を引き受けてしまった事を後悔し、難しすぎるテーマに頭を抱え、自分の中で整理が出来ず、当然思いが伝わるような文章にならず、今思いっきり落ち込んでいる。恥ずかしながら勉強不足を実感。

○　触法問題の現在は？

３月「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察に関する法律案」について閣議決定されており、平成１６年度施行をめざしています。それに対して、野党民主党が対案と称するものを先日提示しましたが、その内容は自民党案の中身となんら変わらず、“精神科集中治療センター”（仮称）を新設し、医療の現場にその責任を押し付け、“精神保健調査員”の名の元に、精神保健福祉士に“自傷他害の恐れ”を調査判定させようということなどです。自分にかかる問題ではないと思っている県支部会員もよそ事ではなくなってきているのが現実になりつつあります。

愛媛県支部では「触法プロジェクト」を立ち上げ、この法案について衆議院議員：塩崎氏と意見交換を行っていますが、この問題は精神科救急、精神科救急病棟などとセットになって迫りつつあります。１４年度もこの問題を会員が自分の問題として取り組むようになるべく、支部活動の充実を提案します。

１５号　「精神障害者ケアガイドラインをめぐって」

平成１３年度３月に「精神障害者ケアガイドラインの見直しに関する中間報告」として改めて作成されたものでは、必要な医療が確保・維持されていることが前提になっており、医療機関がケアマネージメント実施機関になれるというものであり、医療の位置づけが明記されたものでした。このことから医療に取り込まれない地域生活支援をやっていく為にはどうすれば良いのか１５号の特集では考えていきました。

改めて生活モデルとは？生活者の視点とは？ということについてみつめなおす機会となり、私達もまた医療の枠の中での生活支援に慣れてしまっていることを意識しておくことの必要性を強く感じた特集でありました。

御荘病院　　宮本はるみ

平成１５年度より本格的な導入が始まる「精神障害者ケアマネージメント」では、ケアマネージメント手法の技術的な進歩を図ることはもちろんですが、「どれだけ多くの事柄を利用者を交えて自己決定して行くことができるか」が重要な点ではないかと思います。そしてそれと共に、精神障害者の社会復帰に向けて支援者となる福祉職や医療従事者がどれだけ「知り合える」かを意識していくべきではないでしょうか？

実際利用する本人にとって一番重要なことは「自分の生活の中で、どこが、どの部分をサポートしてくれるのか」という点だと思います。そしてまた、利用者が地域で生活していくために、医療が支える部分と福祉が支える部分、どちらも欠くことができず、この２つの分野が別々ではうまいサポートは望めません。

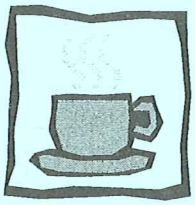
利用者も交えてそれぞれの機関が「知り合うこと」。そのためになにをしていくべきなのか。精神保健福祉士のみでなく、それぞれの機関で様々な職種の方々と共に考えていくことが、まず一歩になるように思います。

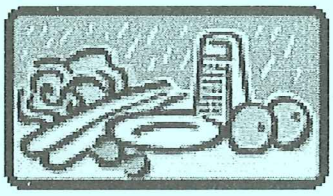
平成病院　　安本昌代

今年の４月から精神障害者の保健福祉相談窓口が市町村になりましたが、体制も様々でホームヘルプサービスについては、まだ始まっていないところもあります。１５年度からはケアマネージメント事業が実施されようとしていますが、今の現状をみて今後どうなるのか不安になります。地域精神保健福祉活動の要として期待されるケアマネージメントですが、本来の目的と反し、今までの精神障害者の処遇史が繰り返されないために、何ができるのでしょうか。「ただ新しい制度が始まるだけ」とのんびりと構えているのではなく、ケアマネージメントがどのようなものかを知り、自分の業務を振り返ることで大切な何かに気付くこともあるのではないでしょうか。ケアマネージメントをどのように地域で生かすことができるかを考え、活動していくことは精神保健福祉士を生業としている者の責務と、自分の襟を正す毎日です。これからも“しぶしぶ通信”は私たちにとって「精神保健福祉士とは」と自らに問う切り口であって欲しいです。

○　ケアマネの現在は？

昨年度の松山市のケアマネ検討委員会では、障害者ケアマネジメント推進事業を実施しての問題点として挙げられていたものの中に、「ケアマネジメントと医療」の項目が追加されました。主治医等がケア会議に参加することに難色を示した利用者もいたとの報告もでていたとのことで、利用者と主治医の関係等を考慮しながら利用者の意向にそった医療機関との連携を上手くとることの必要性がでていました。





１６号　「愛媛の精神科救急システム」

きっかけはシステム開始直前の関係機関に配布された要綱でした。地域の中で精神障害者が安心して医療を受けることができることを目的としているにも関わらず、その内容は早い段階で検討されていたものとは異なり、相談、診察など病状悪化を早期に防ぐための業務が入っておらず、緊急に対応が必要なケースにのみ対応するという緊急入院導入のための内容でした。１６号特集では、関係者へのインタビューという形で実施されている精神科救急システムへの問題提起をするとともに、実際にシステムに参加していくことや検証作業に参加していくことなど、精神保健福祉士の責務としてこのシステムがあるべき姿で実施されていくために実際に行動していくことの必要性を訴えました。

新居浜協立病院　渡辺しのぶ

特集を見せてもらうまでは愛媛県でも岡山市と同じような“ソフト救急”がはじまるんだと思っていました。しかし特集で知った事は、愛媛の精神科救急システムが救急入院導入システムになっていることでした。精神科救急医療情報センターの機能等を見てみると救急対応のための機能に焦点が合わされているようでした。相談やカウンセリングは書かれておらず、これらが業務外だと受け取ることができます。示されている機能の中に丁寧に話を聞くことが含まれているとしても附属のように思えました。

岡山で研修していた時、たまたま夜間・休日センターを見つけて立ち寄ると相談員の方らしい人が出てきてくれ、こんにちはと声をかけてくれました。何でも相談できる雰囲気でした。精神科関連であれば選択せずに応じていると特集で知りましたが、そのとおりだったです。当事者にとっての救急事態を相談しやすいところでなければ救急ではないと思いました。

新居浜・花工房　宇都宮督子

愛媛県の精神科救急システムについては「はじまったらしい」という程度の認識しかありませんでした。それが支部の定例会で谷本さんのお話を聞き、今回のしぶしぶ通信を読み、初めて事の大きさに気付かされました。

ＰＳＷとして仕事をしていながらこのシステムをよく理解していなかったこと、また問題点を探り、自分たちが取り組むべきことを考えていく必要があるのだという思いにまでは及ばなかったことを反省しました。

日々、作業所のメンバーさんやグループホームの入居者から職場や自宅で受ける電話の内容は、具体的な相談というよりは何か気になることへの確認等であることの方が多いように思います。けれども当事者の思いを、些細なことでもひとつひとつ汲み取っていくことが重要で、それが生活の安心感につながっていると感じています。救急システムとして差し迫った状況への対応の充実も大切ですが、本当に当事者や家族の利用しやすいシステムとするならば、岡山でなされているようなソフト救急を重視する必要があると思いました。

牧病院　山口奈々絵

≪緊急特集増ページ号≫というだけあってとても濃厚（濃すぎる！？）で、読み応えのある特集でした。やっと救急が始まると聞き、精神障害者が少しでも安心して夜間や休日を過ごせるようになるかな・・・と思っていたので、始まる当初の案から現在までの経過を知りびっくりです。

恥ずかしいことですが、救急システムが始まったことは知っていたにも関わらず、どこか自分とは遠い所にあるような感じで、一般科の救急システムとはだいぶ違うなぁ・・・と、なんとなく他人事のようにとらえていたように思います。今回特集で取り上げて頂いたことによって、救急システムに実際関わっていないワーカーにとっても現状を知る良い機会でもあり、これからの動きや取り組みを考えていく上でとても大切な特集だったと思います。

○　精神科救急の現在は？

１６号の発行後、Ｐ協会県支部に“精神科救急プロジェクト”を立ち上げ、県支部会員に相談員として参加してもらえるよう働きかけたり、県民に広報するためのパンフレット案を作成し、県に提案したりという活動を続けています。しかし、行われた検証会でも本質的な議論は行われず、システム自体が変わってきているという状況には至っていません。精神科救急については、触法問題とも関連し、精神障害者を隔離収容する社会防衛、治安維持の施策の一部と充分なり得るものです。来年度は県支部にて“救急、触法に関する研修会”を開催する予定です。単にシステムの問題としてではなく全体の流れについて会員全員で考えていく必要があります。

ま と め

今回の企画は会員の皆さんがしぶしぶ通信をどう読んでくれたのかな？という素朴な感想から出たものでした。その中から特集を読み、どういう思い、考えを持ったのか、率直な意見を載せたい！ということから原稿の依頼をしました。今年度を振り返ってみると、テーマについてどう考えるのか、と同時にそのために何をするのかを提案することがポイントになっていたように思います。思いを思いのままで終わらせず、行動に移していくこと。その大切さを実感した一年でした。

特集外担当者一同

第１７回中四国精神保健福祉士大会in岡山

愛媛医療福祉専門学校　村上佳子

「地域生活の援助を考える」というテーマのもと、第１７回　中四国精神保健福祉士大会 in 岡山が、３月２３日・２４日に開催された。１４年度から市町村において居宅介護支援事業、１５年度からは精神障害者ケアマネジメント事業の導入などを目前に、地域生活に視点を当てて、具体的な問題を通じて意見交換をという趣旨のもと、シンポジウム、基調講演、事例検討が行われた。こういった会を私は、目の前の問題にただただ対応するばかりの日々の中で、自分の業務を立ち止まって考えたり、精神保健福祉士としての自分を振り返る時間ととらえている。しぶしぶ通信での報告というこの２日間の大会で私が受け取ったことを整理する機会をいただいたことに感謝しつつ、ご報告したい。

まず、基調講演について。「ＰＳＷがケースマネージメントで果たす役割について」というテーマで、三品桂子先生（花園大学社会福祉学部）が、わが国の精神障害者に必要とされるケースマネージメントと、ＰＳＷがケースマネージメントで果たす役割について講演された。

まず、ケースマネージメントとは

「ソーシャルワークにとってケースマネージメントとは新しい発想に基づく援助概念ではなく、伝統的に実践されてきながらも体系的に精緻化されていなかったものを社会状況にあわせてリバイバルした『古着』なのである」（渡辺）つまり、ケースマネージメントはソーシャルワークそのもの、もしくはソーシ

ャルワークの１つの援助の形態である。しかし、その共通する定義は存在しない。なぜなら、その概念はその国の政治的、社会的、文化的背景及び対象者が抱えている問題と切り離して論じることは出来ないからである。としたうえで、各国の定義を紹介。わが国では障害者ケアマネジメント体制整備検討委員会（２００２、２　ケアガイドライン案）によって、『障害者の地域生活における生活を支援するために、ケアマネジメントを希望する者の意向を踏まえて、福祉・保健・医療のほか、教育・就労などの幅広いニーズと、様々な地域の社会資源の間に立って、複数のサービスを適切に結びつけ調整を図るとともに、総合的かつ継続的なサービスの供給を確保し、さらに社会資源の改善及び開発を推進する援助方法である。』と定義されている。

次に精神保健福祉士が果たす役割について

１　問題点の明確化と改善策の提案（ＰＳＷとして意見をあげていかないといけない）
　ケースマネージメントの技術を取得し、実践する中で改善をはかる。

２　ソーシャルワークモデルの用具の開発（環境をアセスメントする。地域生活支援の担い手はＰＳＷである。ソーシャルワークの視点を備えた用具をＰＳＷが開発する必要性）

３　利用者主導モデルの実践者
　ストレングスの視点――――（ソーシャルワーカーの視点　いいところを強化していく）
　エンパワメントと自己効力感を高める支援（セルフケア能力を高める）

４　変革者　人と環境の相互作用に注目し、介入していく　自らの機関の改善にも努力する
　政策への働きかけ

５　地域のデザイナー　ネットワークの形成と地域づくり

６　アドボケート　利用者の権利を代弁、擁護するだけではなく、セルフアドボカシーが可能になるような支援を行う。

７　スーパーバイザー　ケースマネージメントの技術を高めるスーパーバイザーとしての役割
　スーパーバイザーとしての訓練必要

８　自らの実践からの理論構築　多忙でも研究を行うこと　フレデリック・Ｇ・リーマーの姿勢から学ぶこと　（実践と理論の乖離がないこと　医療モデルに勝つための生活モデル　理論“上”に恥じない力）

と説明された。

そして、講演の最後をエンヴァルの日本講演（１９６６）「専門職としてのソーシャルワークと人権」からでしめくくられた。『ソーシャルワーカーの仕事は、社会の底辺にある人々のエンパワメントを通じて人権と社会正義を追求する専門職なのである。ソーシャルワーカーの専門性は、法律でカバーされないような問題に対処するとき、人権擁護を自らの立脚点とし、人権擁護のために自らをかけた行動をとることにこそある。』

この講演の前に～実践を通して～というサブテーマで４人のシンポジストによる報告があった。その内容は「三品先生の話と、全く違うことに気付くでしょう？」という構成だったのかなぁというのが、その夜の飲み会での結論だった。２日目の事例検討についても内容は、発表も実践の理論化、理論の実践とは言えず、会場との意見交換も充分とはいいがたい印象をうけた。そう考えながら、今回はじめての座長をつとめた私は、ソーシャルワークの基本である「自己決定の尊重」をはきちがえた意見に対しても、なにも言えずにいた。本当に自分の理論のなさにくやしい思いをした。

そんな私の横で、他県の会員にしぶしぶ通信（精神科救急システム）をせっせとアピールし６２部完売させてしまったメンバーを見て、それを報告したメンバーを思い出して・・・

あぁ、勉強しよぉ・・・これが、今回の大会の私の感想だった。

第1回日本精神保健福祉学会
開催のご案内

２１世紀になって、国際社会が激動し、我が国も社会構造の変革の中で、厳しい不況に苦しんでいます。医療・福祉の分野も例外ではなく、先の見えにくい厳しさの中で、触法問題、長期在院、地域福祉等、多くの課題に直面していかねばならないのが、私達の現状です。精神保健福祉士が国家資格化されて３年、精神医療・福祉の分野で、私達は専門性と責任がより要求されてきています。

社会的責任を果たし、専門性を高めていくために、今回から学会とし、記念すべき第１回学会となります。医療、福祉、地域など様々な社会資源と「つながる」をテーマに、研鑽していきましょう。

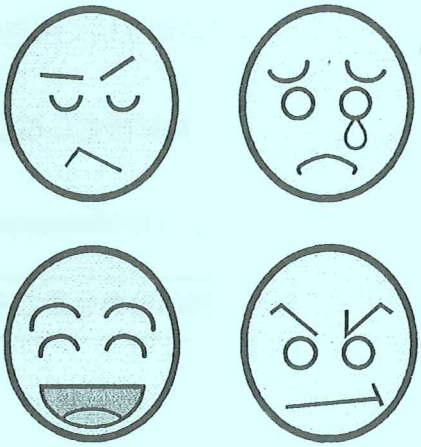
多くの方のご参加をお待ちしています。

大会テーマ
「つながる」

◎高知大会自主企画；２００２年7月１１日（木）
◎大　会　期　日　；２００２年7月１２日（金）～１３日（土）
◎大　会　会　場　；高知市文化プラザ　かるぽーと
〒780－8529　高知市九反田２－１
TEL088－883－5011

『大会・学会　事務局』
〒７８１－０２５２　高知市瀬戸東町３丁目１０９
地域生活支援センター「てく・とこ・瀬戸」内
TEL／FAX　０８８（８４２）０１１９
E-mail　tekutoko@seikaen-hp.or.jp

ちゅうて高知からのお誘いを受け
ちゅうがや、お隣さんの開催じゃき、
みなで行かんといかんぜよ！！



（訳文：いうての、高知からお誘いを受けとんよ、お隣さんの開催じゃけん、みんなで行かないかんわい！！）

編集後記

其の壱　　もりわき

昨年の６月に広報出版部に所属して、はや１年が経ちました。初めて部会に参加したときに、「額に青筋たてて、この人達は一体何をそんなに真剣に考えているのだろう。」と不思議な気持ちになったことが懐かしく思い出されます。一回一回のしぶしぶ通信を作り上げていく過程ではみなさんの想像を絶する時間と労力が費やされています。少しでもそのことが毎回の紙面から感じとっていただけていたなら、部員一同の血のにじむ努力が報われることと思います。・・・とは言ってみたもののバカな事を言い合って、笑い転げている時間があったことも、これまた事実です。

さて今回の特集外は今年度の特集を読んでくれた人達の感想や意見をできるだけ多く紙面に載せることで、しぶしぶ通信の特集の一年間を広報出版部の人間も含めて振り返ってみようというものでした。みなさん一人一人はどんな感想を持たれましたか？それでは今年度最後のしぶしぶ通信です。来年度もまだまだ走り続けるしぶしぶ通信である事を願いつつ、第１７号の幕を下ろそうと思います。１年間どうもありがとうございました。

其の弐　　むらかみ

皆さん今年度の特集はいかがでしたか？どれもタイムリーなテーマで、中身の詰まった特集だったのではないかと、部員一同自画自賛しております。特集・特集外と担当をわけるようになってからは、特集の希望者が毎回多く、いつも取り合い、譲り合いとなっていました。

そんな熱意のある広報出版部員の１年の疲れを癒そうということで今回の企画となり、今年度最後の特集担当者は、いつもとは違うリラックスした雰囲気でかまえていました。しかしそれも束の間、一泊温泉旅行から帰ったあと、何と録音していたはずのテープレコーダーが全部消えているではありませんか！担当者は古い記憶を何とか辿り、見事な座談会を完成させるに至りました。でも今回のハプニングのおかげで、本当に伝えたいことが紙面に出せたのではないかと特集一同前向きに考えております。

今年度、原稿依頼を快く引き受けてくださった会員の皆さん、本当にありがとうございました。

来年度もしぶしぶ通信をよろしくお願いいたします。

ご意見お問い合わせはこちらへ・・・

TEL　089-932-2768 味酒心療内科
FAX　089-931-5545
e-mail keigo-t@ma.neweb.ne.jp